

関西大学生がCOP10に参加しました：参加までのプロセスと参加の意義

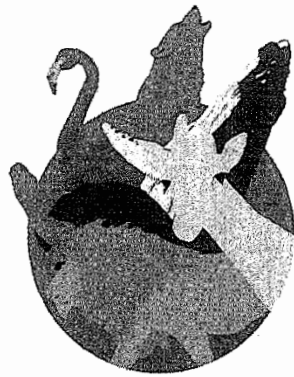
著者	吉田 宗弘
雑誌名	書評
巻	135
ページ	50-54
発行年	2011-04
URL	http://hdl.handle.net/10112/10921

関西大学生がCOP10に参加しました

——参加までのプロセスと参加の意義——

- 学生参加までのプロセス
- 会場印象記
- 学生が参加した意義

吉田 宗弘



昨年一〇月一八日～二九日に名古屋市を中心としてCOP10（生物多様性条約第一〇回締約国際会議）が開催された。この会議に、関西大学生生活協同組合はNGO団体として参加が認められ、経済学部の良永ゼミ生一二名と経済学研究科修士生である吉野夕子さんが数日間実際に会議に出席した。会議の様子は、良永ゼミ生と吉野さんの報告に詳細が記されているので、ここでは参加までの過程、および関大生が会議に出席したことの意義について述べてみたい。

学生参加までのプロセス

正確な日時は覚えていないが、関大生協の仲介によって成立した全学共通の講義科目である環境系三科目担当者と一緒に会し、今後の方針等を話し合う機会があり、二〇一〇年の名古屋でのCOP10への対応が話題となった。二〇〇九年にコペンハーゲンで開催された地球温暖化に関する国際会議（COP15）に経済学部の良永教授と文学部の木庭教授が参加したということもあつたので、名古屋の会議にも参加すべきであるという方向になった。そして、教員として参加するのは、コペンハーゲンに参

加されたお二人に筆者を加えた三名、国内でもあることから学生も参加すべきであるということになった。学生参加者については、三名の教員がそれぞれ選抜するということになった。良永教授に関しては、ゼミにおいて生物多様性をテーマとして取り上げておられることもあり、すでに参加希望の学生もいることから、学生を募ることは容易であると思われたが、木庭教授と筆者に関しては、講義等を通して参加者を捜すという状況であり、参加学生を確保することが可能だろうかという懸念があった。結果的にはこの懸念は現実のものとなり、木庭教授と筆者は学生の確保ができず、参加を希望する良永ゼミ生と吉野さんの参加を実現・サポートするという裏方にまわることとなった。

これまで自分の専門分野に関係する学術的な国際会議には何度か参加した経験はあったが、COP10のような政治的な国際会議に参加した経験はまったくなく、そのような会議に当事者でもない人間がどのような立場で参加できるのだろうかという疑問があった。しかし、ともかく参加の方法を探らなければならぬ。幸い、昔とは異なり、インターネットという便利なツールがあることから、会議のHP等をチェックし始めた。その結果、名古屋国際会議場において条約締結に関する会議が開催

される以外に、会議場周辺ではいくつかの生物多様性に関する展示・発表をはじめとする種々のイベントが開催されることが判明した。この時点では、最悪、これらのイベントに参加することでお茶を濁すこともできるなど考えていた。しかし、メインである会議の詳細がHPからは理解できず、参加方法が見つからないまま時間だけが過ぎて行くという状況であった。

夏休み前、会議場周辺に展示ブースを設けるNGO団体に手伝いという形で何名かの学生が参加できるということになった。しかし、大半の学生の参加のメドは依然として立っていなかった。そのような状況下、夏の終わりに、NGO団体であれば参加登録ができるという情報が舞い込んできた。そこで関大生協をNGO団体として登録し、生協の中にある環境を扱う部門（どのような名称にしたか忘れてしまったが）が会議に参加するという申請をすることとなった。この段階で、参加学生を確保できなかった筆者が団長、木庭教授が副団長ということになった。紙ベースで英文の参加申請書および添付書類を作成し、COP10事務局に郵送した。しかし、レスポンスがなく、とうとう会議が開催される一〇月になってしまった。やはり駄目かと思いつつあったところ、生協事務に一通の電子メールが舞い込んできた。内容は、「あ

なたたちの古典的な参加申請書を受け取りました。CO P10参加はWEB上で受け付けています。そのWEBのアドレスは「」というものであった。やっと参加登録申請のHPにたどりついた。大急ぎでHPを閲覧し、団長、副団長、参加希望学生、および吉野さんの氏名等を入力した。電子メールアドレスは副団長の木庭教授以外はすべて筆者のアドレスを入力した。しかし、またもレスポンスがない。会議までもう一〇日もないという時点で、木庭教授が事務局に英文で問い合わせのメールをした。すると、それとほぼ入れ違いで、多数のPDFファイルが添付されたメールが事務局から筆者宛に届いた。このPDFファイルこそが、筆者、および学生の参加に必要なID番号とパスワードが記された書類であった。これと身分証明書さえあれば会議場に入り会議に参加できる、やっと学生の参加が確定した瞬間だった。

会議場印象記

学生の参加が確定できたことで役目は九〇パーセント果たしたという気分であったが、「団長」という肩書が引っかけりとして残っていた。会議の期間は忙しく、丸一日を会議参加に割くことは不可能であったが、せめて半日でもと思い、一〇月二八日、午前の枚方での学外講義

を終えてから京都駅へ向い、午後一時過ぎの新幹線に飛び乗った。名古屋駅で降り、地下鉄で会議場そばの日比野駅で降りた。その時、参加に例の書類とともに身分証明書が必要なことを思い出した。筆者は自動車の運転免許証を所持していない。ゆえに公的な写真入りの身分証明書としてはパスポートしかない。これを忘れてしまった。関西大学の職員証は所持していたが、銀行の口座開設等では受け付けてくれなかった経験がある。しまったなど思ったが、どうしようもない。しかし、筆者は関大生協というNGO団体の一員として参加するのだから、関大の職員証のほうが現実には有効なのではないか、などと思いながら、会議場のIDカード発行所に赴いた。関大職員証で何の問題もなかった。やれやれと思いながら小雨の降る道を会議場の建物へ向った。

会議場に入ると、学生たちも記しているが、山のような資料が目に入った。たった半日の参加という気分が先立つため、できるかぎり情報を得ようという思いから、次々に手にしてしまう。あつというまに会議でいただいたバッグがいっぱいになり、肩に重さが食い込んでくる。周りを見ると、日本人はほとんどいない。本当に外国にいるようだ。休憩を兼ねて本会議場の椅子に腰掛け、会議の内容よりもウォッチングに専念する。本会議場の前

方の椅子の背もたれには様々な国名や団体名の印刷された紙が貼付されており、これらが各国代表団の席であることが理解できる。中央から後方は、筆者が自由に着席できていることでも明らかのように、マスコミやNGOのためのフリースペースのようだ。

時間があまりないので、他の場所に移動する。入り口付近にはスクリーンがあり、個々の小会議室での予定が記されている。HPの事前検索では、まったくつかめなかった今日のスケジュールが示されている。ここで筆者はようやく、このような政治的な会議と学術会議の違いが理解できた。学術会議では事前にスケジュールは確定している。すなわち、誰が、どこで、どのような講演をするのか、あるいはどのような討議が行われるのかのスケジュールが事前に分刻みで確定している。これに対して、政治的な会議では、討議の方向、合意の有無など不確定な要素があるため、いつどこでどのような会議が行われるのか確定できない。いくつかの国や団体が急遽集まって話し合うことが頻繁に起こる。ゆえに会議場の小部屋はそのようなスペースとして確保されているのである。事前にどんな会議が行われているのかなどと呑気な検索をしていた筆者は、本当に物事を決める会議というものが、半ばセレモニー的に行われる学術会議とはま

ったく異なるものであることに気付いていなかったのがある。会議が生き物であることが痛感された。

会議場の小部屋が並ぶスペースに行く。自由に使えるパソコンがずらりと並んでおり、多数の人が利用している。会場内では無線LANがパスワードなしで利用できる。セキュリティよりも情報授受が優先されている。このあたりも外国にいる感覚だ。ソファにはきちんとネクタイをしめた多数の発展途上国の人が疲れた表情で座り込んでいた。会議も終盤だったので、みんな相当疲れているようだ。時たま、要人が会場に到着する。いったん会場内に入れば比較的自由に行動できるが、このときだけは警備担当者が通路確保などにあたるため、移動制限がかかる。これも政治的な場にいることを実感させてくれる。ずっと関わることであればもっと面白いだろうと思うが、このあたりが物見遊山の半日参加の筆者には限界であった。

学生が参加したことの意義

最後に現役の学生がCOP10のような国際的な取り組みを行う会議に参加したことの意義を述べてみたい。学生たちの報告にもあるが、国際的取り決め締結のプロセスを体感したこと、そして締結までの多くの人たちの努

力、とくに何とかしてまとめようとする努力を見たことはきわめて重要と思う。とかく、異なる意見をまとめることが難しい昨今において、人々の協調ということを目にしたことによつて、民主的に物事を決めることの素晴らしさについて感じてくれたのではないだろうか。民主主義、そしてこのシステムにたどり着いた人間もまだまだ捨てたものではないと思つてくれれば本当に参加させた甲斐があつたと思う。

もう一点、世界共通語としての英語の必要性を認識したのではないかと思う。本会議場には同時通訳のサービスクがあつたが、各フロアでの会話、小部屋での実質的な会議は通訳なしの英語で行われることが多かつたと思う。国際的な場において、情報を集め、そして情報を発信するのに英語がもつとも重要なツールであることを実感したことは、今後、彼らが外国語を習得するにあつたのモチベーションとなるだろう。

ただし、英語の修得において学生諸君にひとつだけ覚えておいてほしいことがある。会議場のあちらこちらで耳にした英語が、いわゆるネイティブの英語ではなく、世界共通語としての、雑多なアクセントの許される英語であつたことに気付いただろうか。共通語としての英語とは、米国式のアクセントの強いCNNニュースのアナ

ウンサーのような発音の英語ではない。米国のダウンタウン以外なら、ゆつくり日本式で恥ずかしながらに堂々と発音すればたいは通じる。英語を母国語とする人口は意外に少ない。筆者はかつてベルギーで行われた国際会議で、米国人学者の早口の英語による質問が理解できずに壇上で立ち往生した東欧の学者を見た。そして、何で米国人は人に通じない英語をまくしたてるのだと憤慨するドイツ人の学者と意気投合したことがある。また、パリの小さなホテルで、アルバイトの若い女の子が部屋番号の英語がわからず (zero が通じなかつた)、部屋の鍵をなかなか渡してもらえなかつたことも経験している。筆者は、日本の大学生は、少なくとも英語の読み書きでは、ヨーロッパ大陸の若者よりも秀でていて可能性があると感じている。日本の英語教育に対しては批判の方が多いが、筆者は日本の学生諸君の英語力は中高六年の教育で基礎は十分できていると思う。あとは堂々と少々の発音のミスなど気にせず話すことだけだと自信を持つていただきたい。もつともそれがなかなか難しく、筆者も何度も失敗しているのであるが。

(よしだ むねひろ・関西大学化学生命工学部教授)

(カット・入江真史)